

百年前の日本への旅／タゴールの『日本旅行者』

丹羽京子

1. 日本での三ヶ月

今からほぼ百年前、一九一六年にタゴール (Thakur, Rabindranath) は日本を訪れ、その名も『日本旅行者 (Japan Yatri)』を書き残した。元号では大正五年、世界に目を転じれば、第一次世界大戦が始まってまもなくの時期である。

タゴールはなぜ日本に来たのか？ まずタゴールはベンガルの地をこよなく愛しているながら、しばらくすると落ち着かなくなり「どこかへ」行きたくなるのが習性だった。このときも「どこかへ」行くという先だった気持ちがあり、その行き先が日本となったわけだが、日本への憧憬はそもそも一九〇一年に岡倉天心と知り合ったころから温めていたようだ¹。その後ノーベル賞受賞をはさんで一九一五年頃にタゴールは外遊を考えるようになったのだが、第一次世界大戦によってヨーロッパ方面に行くのはむずかしくなっていたところへアメリカから講演旅行の招待が舞い込み、タゴールはただちに日本船を予約²、行き帰りに日本に寄る手はずを整えたのだった。

この時点では日本への旅は私的なものだった。しかし、一九一三年にノーベル賞を取って以来初の外遊となるこの旅は、しだいにその性格を変えていく。『日本旅行者』にも記述

があるように、船がシンガポールに着くと日本から講演の話が舞い込み、その後香港では、タゴールの日本到着がこれ以上遅れないようにとの配慮から、上海に寄るはずだった航路を変えてまで到着日を早める決定がなされている。『日本旅行者』によると、この特別の配慮にタゴールも悪い気はしなかったようだが、一方では「わたしとしては遅れることに特に異議はなかったのだが。船の旅は嵐のときを除いてたいへん快適だから」と私信に書いている³。

ともあれ、船は一九一六年五月二十九日に神戸に到着した。このあとタゴールは九月二日にシアトル行きの船に乗り込むまで、三ヶ月強を日本で過ごす。神戸での出迎えの熱狂ぶりは、タゴールの表現によれば「人間サイクロン」並で、もともとの知り合いであった横山大観や河口慧海などのほかに、在日インド人、一般の日本人、新聞記者などに囲まれて大騒ぎとなった様子が伺える。

このあとしばらくの間、人々の熱狂に巻き込まれるようにしてタゴールの日々は過ぎていく。その一端を覗かせるものとして、六月一日のスケジュールを見てみると、まずこの日、タゴールは午前中に神戸から大阪の丸山幹治宅（当時大阪朝日勤務）に赴き、茶の湯と会席料理を楽しんだあと、いったん神戸

に戻って着替え、夕方の列車で再び大阪に向かい、夜は大阪天王寺ホールで“India and Japan”というタイトルで講演をこなしている。このあと一行がどこに泊まるかについて混乱があったらしく、タゴールは夜半過ぎまで大阪市内を連れ回された上、真夜中に市電に乗っているところを群衆に取り囲まれたとの記事もある。翌日に大阪朝日の重役が不手際について謝罪に訪れたとの記録があるので、相当の混乱だったようである⁴。

もちろん毎日のことではないが、このような「公式」プロダラムは六月五日に上京してからも当分続く。例えば六月十日は時の首相、大隈重信を訪ね、その足で早稲田大学を見学、午後には岡倉天心の設立した日本美術院を訪れて“Ideal of Art”と題する講演を行い、そのまま美術院の面々と会食に赴いているし、翌六月十一日は東京帝国大学において“The Message of India to Japan”と題する講演、十二日は能の鑑賞、十三日には上野の寛永寺で二百人ほどを集めた歓迎会が行なわれている。

実際、日本において異国の詩人がここまで歓待されるなど、ほかに事例が見当たらないのではなからうか。しかしそれらもさすがに六月後半には一段落着き、以後は比較的平穏な日々が続く。一般的にはタゴールのスピーチ、それも日本を批判した一節が不評をかこち、旅の後半では人々の熱狂も冷めて寂しい日々を過ごしたように語り継がれているが、ことはそう単純ではない。

タゴールのスピーチが不評であったことは事実である。新聞、雑誌に載った評で、これを高く評価したものはほとんど見当たらない。しかしそのスピーチをもってタゴールの人氣が突如衰えたと単純に捉えるには疑問が残る。タゴールは七月二日

にも慶應大学で“The Spirit of Japan”と題する講演を行っているが、東大講演ののち、批判的な評が出揃ったこの時期においても人々は講演につめかけ、チケットが手に入らないために入場できないものが相次いだのである。ちなみに来場者は、実際に講演に行った秋田雨雀によれば、東大講演が千五百〜六百人ほど、慶大講演が千人ほどではなかったかと推測されている。

おそらくタゴールに対して最も敵意をあらわにした記事のひとつが岩野泡鳴の「タゴール氏に直言す」「岩野一九一六」であろうが、これもスピーチに対する反論というより、人物批判、あるいはタゴールを取り巻く状況への批判となっている。さらに言えば、こうした「タゴール批判」は前年の「タゴール・ブーム」のときにすでに繰り広げられたもので、スピーチを問題にしているというより、日本におけるタゴール人氣のありようを問題にしているものも多い⁵。ここではこれ以上踏み込まないが、一般の人々、特に学生や女性の熱狂と、そうした現象を喜ばない知識人という構図も存在したのである。

ともあれ、三ヶ月以上にも渡るタゴールの日本滞在には、新聞記事にあらわれるような「公的」な面と、それとは異なる「私的」および私的関心を伴う面があったことをここでは指摘しておきたい。そしてここで取り上げる『日本旅行者』はむしろそうした私的関心を色濃く反映したものであることは間違いない⁶。

六月五日に東京に着いたタゴールはいったん上野の横山大観邸に落ち着いたが、そこが手狭であることから、横浜の原富太郎宅（現在の三溪園）に移る。原氏はもともと岡倉天心の友人で、大観や観山ら天心門下の画家の後援を託されたとも言われ

ており、当時まだ新進であったこれらの画家の作品を多数購入している。タゴールは今日では名作として知られるこれらの作品を原氏宅で鑑賞している。

タゴールは六月十八日から日本を旅立つまで基本的に原氏宅に滞在し、原稿執筆などをして日々を過ごす。それでも訪問者はあとを絶たず、数々の質問を携えた学生たち（朝鮮半島出身の学生を含む）のほかに、秋田雨雀、佐佐木信綱、渋沢栄一⁷なども原氏宅にタゴールを訪ねている。また、原氏宅を離れて日本女子大の軽井沢にある三泉寮を訪れたり⁸、その足で五浦の故岡倉天心邸を訪れたりもしている。

こうしてタゴールは三ヶ月を日本で過ごし、九月二日にシアトル行きの船に乗り込んだ。この間、タゴールが何を見、何を思ったか的一端が、『日本旅行者』にあらわれているわけだが、次章以下、この紀行文を見ていくこととする。

2. 『日本旅行者』の背景

この紀行文の内容に入る前に、まず背景となる事柄について整理しておきたい。『日本旅行者』はもともと雑誌の連載として書かれており、それは五月一日にコルカタのキディルプール埠頭で船に乗り込んだ時点で始まっている。原稿は途中立ち寄った港などから折々に送られ、順次連載された。実はこの紀行文は「日本」旅行者と題しながら、その三分の二までが日本到着以前の記述で占められているのだが、それはこうした事情からある程度説明される。すなわち、船旅のほぼ一ヶ月の間、比

較的時間に余裕があったのに対し、日本到着以降は目まぐるしい日々を過ごしていたため、結果的にこのようなややいびつな構成となったのである。連載が単行本として出版されたのは一九一九年のことであった。

当初これらの文章が連載されたのは「緑の葉 (Sabuj Patria)」という雑誌であった。「緑の葉」はタゴールのお気に入りの子、インディアの夫であるプロモト・チョウドリ⁹の手によるもので、事実上、この雑誌は口語化運動の牙城としての役割を果たしていた。ベンガル語の書き言葉においては、近代化以降、Sadhū bhasha と呼ばれる一種の文語体が使われていたが、この時期文章における口語化運動が繰り広げられており、プロモト・チョウドリはその先頭に立っていた人物である。実際には文章の口語化はそれほどやすくは広まらず、タゴールがそれに賛同していち早く散文では全面的に口語を採用したにも関わらず、すべてが口語化されるのは一九五〇年代前後と云ってよいのだが、それはともかく、一九一六年出版の長編小説『家と世界』で完全口語化を成し遂げて以来、タゴールはいっさいの散文を口語文で書くようになり、この『日本旅行者』も例外ではない。

実はタゴールにはもともと口語体への指向性があり、それはこの種の文章においていっそう顕著だったのだが、それは紀行文というジャンルにも関わることなので、ここでまずタゴールの紀行文を概観しておくべきだろう。

数え方にもよるが、タゴールの紀行文は最大で十作と考えられる。それらは『ヨーロッパ滞在通信 (Europe-prabasi Patria, 1882)』を皮切りに、『ヨーロッパ旅行者の日記その一 (Europe

Yatiri Diary 1, 1891)、『ヨーロッパ旅行者の日記その二 (Europe Yatiri Diary 2, 1893)』『日本旅行者(Japan Yatiri, 1919)』『旅行者(Yatiri, 1929)』『ロシアからの手紙 (Russian Cithi, 1931)』『日本で、ペルシヤで (Japane Parasye, 1936)』(このうち「日本で」の部分は『日本旅行者』の再録)、『西洋への旅 (Pashcayabhraman, 1936)』『道と道の果てに (Pathe o Pathe Prante, 1938)』そして『道で書き貯めたもの (Pathe Sancay, 1939)』となっている。このうち、『西洋への旅』は『ヨーロッパ滞在通信』と『ヨーロッパ旅行者の日記』の再録である(ので実質は九作とも言える)。

一見してわかるように、タゴールはこの種の作品に「旅行者(yatiri)」という言葉を多用し、「旅行」もしくは「紀行」(yatra)もしくは(bhraman)という単語をあまり当てはめていないのだが、そのことはいったん置いておく。

もうひとつ目立つのが「手紙 (cithi)もしくは (patra)」という単語である。実際『日本旅行者』も、雑誌掲載時には、「日本旅行者の手紙 (Japan Yatiri Patra)」あるいは「日本からの手紙 (Japaner Patra)」などのタイトルとなっていた。実はタゴールにおいてはこの「手紙文」すなわち「書簡集」と「紀行文」の区別は曖昧で、上に挙げた「紀行文」のうち、『旅行者』の中に含まれる「ジャワ旅行者の手紙」および『ロシアからの手紙』、『道と道の果てに』、『道で書き貯めたもの』はもともと海外から個人宛てた手紙を集めたものなので書簡集とも解釈できるものなのである。

そしてまた、その書簡集もタゴール独特の色彩を帯びていることはここで指摘しておくべきだろう。そもそも手紙魔と言ってもよいほどの膨大な数の手紙をしたためたタゴールは、あ

りとあらゆる書き物に手を染めたにも関わらず日記だけは書き残しておらず、これらはいわば日記がわりという側面も持つ。一方これらの手紙の一部はタゴール自身によって出版もされており、そうしたものはもはや私信ではなく、文学作品の一種とみなすこともできる¹⁰。そうした例が、大部分姪のインディラに宛てた私信をまとめた『切れ切れの手紙 (Chinapatra, 1912)』であり、あるいはひととき盛んに手紙を交わしたラヌ・ムカジーとのやりとりの一部をまとめた『バヌシンホの手紙 (Bhanushimher Parabali, 1929)』である。

話を口語体に戻そう。実はタゴールの紀行文はそもそものはじめ、つまり一八八一年の『ヨーロッパ滞在通信』から口語体で書かれている。これらは個人宛の手紙をまとめたわけではないが、手紙形式で書かれており、その序文においてタゴール自身、「もしわたしたちが面と向かって話すときのことばが、それが目に映る段になったとたんに変わってしまうとしたら、それは辻褄が合わないと思われるから¹¹」口語文で書いたのだと語っている。「目に映る」とはもちろん読むことを指し、タゴールはここで、手紙形式で書く際には話すように書く方が自然であると主張しているのである。興味深いのは、その序文自体は文語体で書かれていることで、当時このような口語文を発表することがいかにめづらしいことだったかが伺える。

タゴールはもともと手紙類をすべて口語文で書いており、およそものを書くときには文語体で書くのが主流である時代にあつて、斬新な指向性を持っていたと言える。つまりタゴールは手紙においては「語りかけるような」文章を求めたのであり、それは個人宛の手紙でなくとも、「手紙のような」書き物には

すべて当てはまると考えたのである。

先に挙げたいいわゆる「旅行記」のうち、いくつかはもともと私信であったことはすでに述べた。これらは旅先、特に海外から書かれたものであったために結果的に「紀行文」と解釈することもできるわけだが、このようにタゴールの作品世界では、紀行文は手紙に準じるものとなっており、結局のところ書簡集と紀行文の厳密な区別はない。『日本旅行者』は始めから連載目的で書かれたもので、もともと私信であったものとは異なるとはいえ、少なくともタゴールにとって同一のスタイルに属するものだったのだろう。

さて、先に指摘したタイトルの「旅行者」についてだが、このネーミングもまた、タゴールのこの種の書き物への指向性をあらわしている。タゴール自身、この『日本旅行者』をどう考えていたのか、まず、原稿を送るにあたり、編集者のプロモト・チョウドリに書き送った手紙を見てみよう。

これらのわたしの書き物は手紙の連なりでもなく、エッセイというわけでもない。わたしはただ心に浮かぶままを書き、それを見直すこともしないつもりだ。ここにわたしの旅が映し出されているかどうか判然としないし、とどころどこ辻褄が合わないところがあるかもしれない。けれどもそれでもかまわない¹²。

つまり手紙よりも、エッセイよりも自由に書くということだろうが、タゴールは『日本旅行者』のなかでも折に触れて自分の書いているものについて語っている。例えば、

あなたがたはわたしに尋ねるかもしれない、「今日ここまでおまえが書いてきたもの、これはいったいなんなのか？ 文学なのか、それとも哲学的考察とも言うべきものなのか？」と。これを哲学的考察と言うことはできないだろう。哲学的考察においては、それをする人間ではなくて、真理こそが問題になるが、文学ではそれをなす人間こそが中心にあり、真理は二の次なのである¹³。

婉曲な言い方ではあるが、タゴールは、これは哲学的考察というより、文学であると言いたいようである。しかし文学かどうかということより、肝心なのは中心にあるのが人間、つまり作者である自分自身であるということにある。別の箇所では次のようにも述べている。

わたしのこれらの書簡が、日本の實際を映し出したものとして教科書に選ばれるということはけっしてないと断言できる。日本に関してわたしがあれこれ書いたことのなかには、日本も存在しているが、わたし自身も存在している¹⁴。

ここにおいてタゴールははっきりと自分自身の存在を主張している。つまり旅行そのものではなく、旅をしている自分こそがこの作品の中心にあるという主張であり、タゴールはそれを意識して「旅行者」というタイトルをつけたと考えられる¹⁵。およそ旅行記には記録を中心にしたものと、旅行をしている本人の印象なり思索なりを中心とした両極のありようが

あるが、タゴールの旅行記は明らかに後者に属する。そしてタゴールはそのようなものとしてこれを読んで欲しいと読者にあらかじめ訴えているのである。

3. 『日本旅行者』をどう読むか

この書においてまず日本の読者が興味を持つのは、百年前の日本をタゴールがどのように描いたかであろう。しかしそう思つてこの書を紐解くと、読者の期待は二重の意味で裏切られることになる。ひとつはすでに述べたとおり、日本がなかなか出てこないことであり、もうひとつは日本に関する具体的な記述に乏しいことである。

この『日本旅行者』は、全十五章のうち実に十一章までが日本到着前の船の中での記述で占められ、ページ数にして三分の二に近い部分にはほとんど日本はあらわれてこない。ただしタゴールは日本船（土佐丸）に乗っていたので、日本人船長や乗務員たち、日本人の人間関係などについての記述は前半にも散見する。タゴール自身によれば「船から日本を味わい始めて」¹⁶「いたのであり、これらはのちにあらわれる日本についての考察の伏線となつている。

それではこの前半部分にはいったい何が書かれているかと言うと——タゴール自身はそのような言い方を好まなかつたようだが——いわば「哲学的思索」とでも言うべきものがここには練り広げられている。例えば船が出航した直後にはこのような文章が続く。

この心地よさは、ただ漂っていることから来るのではない。……（中略）……人は歩いているときには、風景の全貌を見ることはできない。けれどもこうして漂っているときには、相反するふたつのありよう——坐っていることと進んでいること——が完全に調和する。つまり、進んではいるけれども、進むことに心を向ける必要がないのである。だから心は目の前にあるものを心ゆくまで眺めることができる。水と陸と空のすべてをひとつのものとして見るができる¹⁷。

こうした思索は、見るとはなにか、そして「見る者」としてのわたしへの考察へとつながっていく、あるいは空と海、光と闇などへの思弁へと広がっていく。船に乗っている間じゅう、タゴールのこのような思考の連なりはとどまるところを知らず、六章、七章と進むにつれ哲学を通り越してまったくの自由な思索、あるいはときに詩的な表現へと発展していく。日々海と空ばかりを眺めながらタゴールは言う——

この現象世界、この色白の娘は¹⁸、色とりどりの美しい衣装を身につけて逢引に向かう。あの闇の方へ、あのいわく言い表しがたい方へ。動きの取れない規則のなかに捉えられると彼女は死んでしまう。彼女は岸を抱いて黙って坐っていることはできない。岸を離れて出て行ってしまう。その道のりは危険な旅である。道には刺があり、蛇が待ちかまえ、嵐が襲う。それらすべてを乗り越えて、危険を顧みずに彼女は行く。それはひたすらあのいわく言い難い無限に惹かれてのことである。未知な

るものの方へ、さらなるものの方へ、岸を離れてこの逢引への旅はつづく¹⁹。

もちろん旅をしているという自分のおかれた状況からの連想もあるが、日本へ向かっているという具体的な旅とはかけ離れた彷徨の表現である。タゴールは続ける。

しかしなぜ行くのか、どこに向かつて行くのか、そこには道の跡などないし、なにも見えないのだ。なにも見えない。すべては不確かである。しかしそれは虚無とも違う。なぜならそこから笛の音が聞こえてくるからだ。わたしたちの歩みは、目で見て進むものではない、この旋律に惹かれて進むのだ。目で見ながら進むのは、理性による歩みであり、そこには計算があり、根拠がある。そして彼らはぐるぐると岸の間を回るのみである。その歩みは前に進むことはない。しかし笛の音を聞いてそれに惹かれて進むものは、生死の観念もなくしてしまう。そしてそうやって我を忘れて進むことによって世界は前へと進んできたのである²⁰。

このような抽象的な思考に終始している第六章、第七章は、船がシンガポールに到着し、また出発する間に書かれており、シンガポールについての記述は船が洋上にあつた九章においてやっとあらわれる。こうしてとぎれとぎれに「実際の旅」もあらわれるのだが、それらの記述はまた、ある意味日本の描写に向けての伏線となっている。例えばタゴールは、最初の寄港地ラングーンでその工業化された姿を以下のように描写する。

まずはじめにイラワティ河から町に入っていくときの、この国の印象はどのようなものだろう。目に入るのは、川岸の大きな石油工場が高い煙突を何本も空に向けて突き出している光景である。それはあたかも（巨大な）ビルマ人が横になって葉巻をふかしているようにも見える。それから進むにつれてビルマや外国の船が群れとなっているのが見える。そしてさらに波止場に着いても、岸のようなものはいっそうに見当たらない。何列にも並ぶ棧橋は、巨大な鉄のヒルのように、この国の体にぴたりと張り付いてしまっている²¹。

このような工業化された町に対するタゴールの嫌悪感は港に着くたびにあらわれ、次の寄港地ペナンでもまた、工場の煙突を醜いものとして捉え、シンガポールを経て香港に至ると、「（コルカタの）キディルプル埠頭を皮切りに、ここ香港まで、港ごとわたしは商業主義というものの様相を見てきた。それがどれほど巨大なものであるか、このようにして自分の目で見なければどうていわからなかつただろう。ただ巨大だというだけではない。醜悪と言ってもよい状況である²²」とそれらをひとつつらなものとして批判している。この延長線上で船は神戸に入港し、当然ながらタゴールの神戸の街に対する第一印象はけっして明るいものではない。

それにしても問題なのは、世界中のすべての文明が、現代という同じ鑄型に注がれて全く同じかたちになってしまっていることだ。あるいはかたちなどないとも考えられる。この窓から

見える神戸の町は、鉄の日本であつて、血の通つた日本ではない。一方にわたしの窓があり、もう一方に海があるが、その間に町が広がり、それはあたかも中国人の描く巨大で恐ろしい龍のようで、あのくねくねした怪物が地球上の緑を食い尽くしてしまつたかのように見える。その何層にも重なる鉄の屋根は龍の背の鱗のように、陽の光を受けてきらきらと光っている。²³

近代化された都市に向けるタゴールの危機感をもつたまなざしは、やや大げさなものに感じられるかもしれないが、百年前の世界の工業化の状況は今日とは異なつてゐることをまず斟酌しなければならぬだろう。ここに見えてゐるのは現代のスマートな「近代化」ではなく（それでもタゴールが好んだかどうかはわからないが）、いわばチャップリンの「モダン・タイムス」的な非人間的な工業化の世界なのである。

そしてもう一点、ここでタゴールは神戸やその他の個別の都市を批判してゐるのではなく、世界全体が一樣に工業化、近代化に向かつてゐるさまに疑問を投げかけてゐるということにも注意しておきたい。タゴールはそもそもその出発地であるガンジス河口のありさまも同様に嘆いてゐるのだが、タゴールにとって船から見たときの点々と続く人間の営みのありようが、いかにあらためて危機感を感じさせるものだったかに想像力を働かせてみるべきだろう。

そしてまた、コルカタを含めたこれらの土地がことごとくイギリスが抑えた植民地であつたことにも注意を払う必要がある。日本にとつては工業化、近代化は自らの独立を守るためのいわば頼もしい砦のように感じられたかもしれないが、これら

の植民地にとつては、それは押し付けられ、搾取される現状の象徴でもあつたのだ。であれば、そうした系列に属さないはずの日本が同じような姿を見せていたことに、タゴールがなおい層失望したとしても不思議ではない。

ともあれ、タゴールはやつと日本に辿り着き、以後、十二章から最後の十五章までは日本にまつわる記述となる。そのうち十二章は、日本到着時の騒乱とも言つべき出迎えのありさまと、そののちに落ち着いたインド人商人の家の記述で占められる比較的短い章である。タゴールはこの家の女中の働きぶりにも目を留めているが、これはまだ、ラングーンで見た働き者の女性たちの記述の延長線上にあると見るべきだろう。タゴールが本格的に日本を語るのは、次の十三章、そして十四章であり、この二つの章がこの旅行記の中心部分であると言つてもよい。

十三章はタゴールが日本到着後一週間目に書かれてゐる。この間タゴールは神戸と大阪を経験しており、ちやうど明日は東京へ行く、というタイミングである。そしてこの章の前半に先に挙げた「鉄の」神戸の記述があらわれる。それに続けてタゴールはこのように語る。

この必要という名の怪物は、おそろしく固くて醜い。…(中略)
：神戸の町を背後から見わたつたのは、人間の必要というものが、自然の多種多様なものをひとつの形に押し込めてしまふということだ。人間には必要がある、ということばが徐々に膨れ上がり、口を大きく開けて、今や地球の大部分を飲み込もうとしている。自然も単なる必要の集まりであり、人間もただ必要なものとしての存在になつてしまつた。²⁴

実はこの「必要」にまつわる考察は、日本に到着する以前、船の上でさまざまな思索を繰り広げていた際にも繰り返されているのだが、このいわば「自由連想方式」のような書き物では、それがゆえに同じイメージやテーマが繰り返しあらわれ、そのためこの紀行文はそのいびつな構成にも関わらず不思議な一貫性を保つてもいる。

このあと、タゴールは日本人の服装が世界共通の「オフィスの服装」になってしまっていることを嘆き、それにひきかえ女性の服装が昔ながらのものであることに目を留め、そのことを「日本の女性たちは、日本の装いをして日本の尊厳を守るという重責を担っている。彼女たちは必要をなにより大事なものは考えていない。それゆえ、人の目と心を楽しませてくれるのである²⁵」と語っている。

このあたりからタゴールはいよいよ本格的な日本文化の記述と分析に入る。まずタゴールは日本人が無駄に騒ぎ立てないことを語り²⁶、この抑制したありようが日本の力のある種の秘密であると語る。そしてその文脈で、日本の俳句についての説明が続く。ここでタゴールは芭蕉の有名な句、「古池や」と「枯れ枝に」を翻訳紹介しているが、それらの説明は簡潔にして理にかなったものとなっている。この章ではそれに続けてさらに生け花と茶道の記述が続く。茶道の記述は比較的細部にわたってなされており、この旅行記で読者が日本を体験できる数少ない箇所となっている。

タゴールは茶道のことをある種の「宗教的修行(サーダナー)」であると語っているが、この認識には岡倉天心の『茶の本』の

影響もあるかもしれない²⁷。実は俳句に関してタゴールには来日以前に一定程度の知識があったことが裏付けられており、これらの部分には、実際に日本が来たがゆえの新たな発見とは言えないものも含まれる²⁸。

十三章の最後に挙げられた日本の混浴文化に関する記述には、タゴールらしい側面が垣間見られる。すなわちタゴールはそれを奇異なもの、あるいは非難すべきものとして退けるのではなく、混浴の習慣は日本人が互いの体に対して妄想を抱いていないがゆえのものだと積極的に評価する。その是非はともかく、タゴールが常にいわゆる「常識的な」判断、特に西洋からもたらされた価値観から自由であったことは指摘しておきたい²⁹。

日本に関する記述という点では次の十四章がハイライトであり、ここでは十三章がさらに発展し、実際の日本での体験ともあいまってタゴール独自の日本論が展開されている。

十四章がいつ書かれたかは判然としない。大観邸の記述に続いて、原邸の記述もあり、そこで目にした大観や観山の絵についての詳細な説明もあるので³⁰、数日間にわたって書かれたのかもしれない。

十四章では、まず苦勞して人をかきわけ大観邸に到着したさまが描写され、そして大観邸においてやっと日本の「内なる世界」に触れることができたこととタゴールは語る。ここでの日本の家に関する記述はかなり詳細であるが、タゴールの常として、ただ日本の家のありようを紹介するだけでは満足しない。タゴールは語る。

日本人は、ただ芸術において大家であるばかりでなく、人間の生活という営みをも芸術として手中にしているのではないだろうか。彼らは、価値あるもの、それそのものに威厳あるものためには、十分な空間が必要であることを知っている。完全であるためには、なにより空間が必要なのである。物で溢れかえっていることは、人生を豊かにする妨げになる。この家のなかのどの場所を取っても、大切にされていないところはなしいし、無用なものもない。無駄に目を刺激するものもないし、耳障りな音もない。³¹

タゴールはこの先、自国の騒がしさと日本の静けさ、インドの家の過剰でごたついたありさまと日本の抑制されたありようとその美意識を対照させていく。そしてこの美意識を鍵としてタゴールは日本文化もしくは日本人のありようを読み解こうとするのである。

日本人は美の王国を全面的に手に入れた。およそ目に入るものすべて、どこにもおろそかにされたり、無視されたりしているものはない。いたるところに完璧さの証がある。ほかの国では、特別にそうしたことに通じている人々の間にのみいわゆる鑑賞眼があるものだが、ここではそれがすべての人々に共有されている。ヨーロッパでは、万人のために教育が普及し、またその多くの国では万人のための軍事教練が広がっているが、ここで見るような万人のための美意識の修行は世界のどこにも見られないものである。日本では、みながみな美のために自分を捧げている。³²

日本人の美意識、そして日本画に対するタゴールの評価は最大限のものであると言える。大観や観山の作品に対する真摯な鑑賞は特筆すべきもので、これらの日本画家については来日以前から知識があつたとは言え、実際に大作を目の前にした体験は大きかったに違いない。事実タゴールは、数多くの私信で日本画に関して繰り返し書送っており、しきりにベンガルからだがれかが学びに来ることを勧めてもいる。であるからこそ、以下に見られるような「醜い」光景を日本で見ることには、タゴールは耐えられなかったであろう。以下の文言は『日本紀行者』中、ほとんど唯一の批判めいた部分である。

日本における最良の表現は、尊大さのあらわれではなく、自己を捧げる心のあらわれにある。この表現は人を惹きつけ、傷つけることがない。そしてだからこそ、その日本でこれと正反対の動きを見ると、特別に心が痛むのである。中国との最近の戦争に勝利したからといって、その勝利の印を刺のように国のあちこちに植え付けようとするのは、野蛮な行為であり醜いということ、日本人なら理解すべきであろう。³³

さてこのような日本の解説とともに、タゴールはそれをベンガル、もしくはインドと比較する視点を提供していく。しかしその比較は単純な二国あるいはふたつの文化の比較ではなく、その背後には常にヨーロッパの存在がちらつく。タゴールは日本に住むインド人が西洋式に家をごたごたと飾っていることを歎いて言う。

わたしは日本に住んでいるインド人に関して理解に苦しむことがある。彼らはヨーロッパのさまざまな不必要で醜いものを真似ているが、日本のものが目に入らないのだろうか？ 彼らがここで学んでいることはすべてヨーロッパのものであって、その上少しでも経済的なあるいはなんらかの便宜があればすぐにでもアメリカに行こうと思っている。：（中略）：わたしたちの生活に役立つものを、ヨーロッパからではなく、ここから取り入れることができるはずだ。それ以外にも、生活様式などをわたしたちが躊躇することなく日本から学ぶことができれば、わたしたちの家も習慣も、もう少し清らかなものに、美しいものに、あるいは節度あるものになったのではないだろうか。：（中略）一方で日本に住むインド人たちは言う、日本は我々アジア人を無視している、と。しかし我々も日本を無視してはいないだろうか。そのもてなしを受けながら、真の日本を見ようとせず、日本を通してただ歪められたヨーロッパだけを見ているのではないだろうか³⁴。

こうした発言は、この書がベンガル語で書かれている、つまりベンガル人に向けて書かれていることを思い出させる。『日本旅行者』は日本旅行の記録ではなく、日本で（あるいは日本に向かう船上で）つれづれに考えたことの連なりであることはすでに述べた。しかし「手紙」と「紀行文」を厳密に区別することをしなかったタゴールの文章には、受け手であるベンガル人へのメッセージが自ずと現れてもいるのである。

このようなメッセージ性は、最終章の十五章になると一層鮮

明になる。十五章はなぜアジアの中で日本だけがヨーロッパに對抗できたのかという問題提議から始まる。日本の急激な近代化についてタゴールは「老木をある場所から引き抜いて別の場所に植え替える術を日本の庭師たちは知っているが、まるで同じようにヨーロッパの教育を、絡み合った根っこごと、そして葉の茂った枝ごと自分の国の土にひと晩のうちに植え替えてしまったのである。そしてその木は葉を落とさなかったばかりでなく、翌日から実をつけ始めた³⁵」と表現しているが、これは素直な驚きであって、そこに批判めいた響きはない。そしてなぜそのようなことが可能だったのかという問いに対してタゴールは、日本人は「そもそも最初からそれを築き上げなければならなかったのではなく、はじめからそれはあったと考えるほかない³⁶」と答える。こののちにまたタゴールは世界の民族精神を動的なものと静的なものに分類し、日本の精神はもとも動的なのだと言明した上で、さらにその動的な力は民族的な混血から来ると説明する。その上、国土が狭いことも有利に働いたというのがタゴールの考えである。

タゴールのこの説明はある種直感的な印象であり、厳密なものでも科学的なものでもない。ゆえに異論も多くあるだろうがしかし、タゴールはここで世界全体のなかで日本のありようを位置づけ、最終的にはその延長線上でベンガルの位置を捉え直そうという意図をもって話を進めているのである。事実このあとタゴールは「インドのなかではベンガル人が日本人と似たところがあるのではないか³⁷」と語り、「どれほどの苦痛を伴おうとも、わたしたちは、西洋と東洋の融合の門を開く」ということがベンガル人の責務であることを忘れてはならない³⁸」とい

うベンガル人へのメッセージが導き出されている。

およそ以上が『日本紀行者』の全貌であるが、最後にここに書かれていないことに関して言及しておきたい。記録ではない以上、何を取り上げていなくとも不思議はないのだが、それでも目立つ点がいくつかある。

ひとつは日本で行われたスピーチに関する記述がまったくないことであるが、それはスピーチなどの公式行事が、こうしたタゴール自身の私的関心やつれづれなる思いとは異なる次元に属することに起因するだろう。

ふたつめは新たな交友関係が生まれた形跡がないことである。『日本紀行者』のなかで個人名が挙げられているのは、以前から交友があった大観らのほかは、長期間その家に滞在した原氏のみで、個人的にタゴールを訪れた各人の名前はおろか、新たな日本人との交流についても書かれていない。コミュニケーション・ギャップの問題もあつたらうが、これだけ長期にわたり滞在し、多くの人と会いながらその点ではあまり成果がなかったことを感じさせる。タゴールは岡倉を高く評価していたが、以後、それに匹敵する人物を日本に見出すことはなかった³⁹。この点に関してはさらに後述するが、ここでは当時の文学者との交流の少なさに注意を喚起しておく。日本の文学者の多くは、さまざまな要因からタゴールに対して冷ややかな目を向けていたのだが⁴⁰、タゴール自身も、もともと同時代の作家や詩人にほとんど関心を持たない傾向があつた。事実、アメリカやヨーロッパにおいてもその傾向は顕著で、タゴールは時として欧米の文壇から関心を持たれることはあつても、自分から同時代の欧米の文学に強い関心を持つことは終生な

かつた。

もうひとつ、タゴールの『日本旅行者』に顕著なのは、日本文化として取り上げられているのがもっぱら「伝統文化」であり、当時の日本の状況——政治的状况であれ、社会的状況であれ、あるいはまた流行の事柄なども含めて——に関する記述がまったくないことである。これもまたタゴールの傾向なのだが、「今」や「時流」に対する強い関心が見られないのは、『日本紀行者』に限つたことではない。

総じてこの紀行文は百年前の日本を描きながら、「百年前はこうだった」という感慨を抱かせる類のものではないと言えるだろう。確かに今日では女性といえどもみながみな着物を着ているわけではないし、日本の家もすっかり洋風になつてかつてのシンブルさを失つている。しかしタゴールがここに見出した美意識というコアはやはり、日本の文化の中に厳然と存在しているし、芭蕉の評価は揺るぎなく、大観や観山などの日本画家に至つては当時よりも一層高く評価されていると言つてもよいだろう。結局のところ、『日本旅行者』の日本は、「失われた日本」、「忘れ去られた日本」というより、少しばかり遠くなつたとはいへ、太古から流れている日本文化のありようをあらためて思い出させるものとは言えないだろうか。

要するにタゴールは、単に保守的というよりも、日本文化の中でも時の流れに左右されないものに注目したと考えるべきだろう。タゴールという詩人はともすれば不思議な存在で、ベンガル文学の歴史においてはその前と後ではおよそその流れを異にしてしまうような存在でありながら、どこか時間の流れの外にあるようなところがある。タゴールはたしかに百年前に

日本を訪れ、これらの文章をしたためた。しかしそこに描かれたのは、古くもあり、新しくもある種「永遠の」日本だったのだ。

4. まとめて代えて

『日本旅行者』は、ベンガル語において唯一の、あるいは初めて書かれた日本旅行記というわけではない。にも関わらずこの書は、ぬけた影響力を持ち、ベンガルにおける日本イメージを一定程度担っていると云ってよいだろう。今日でも芭蕉のふたつの句は教養あるベンガル人には親しまれており、日本と言えば岡倉や日本画が話題になることもしばしばである。このように『日本旅行者』はベンガルにおける日本論を代表するものなのだが、その理由は、これが著名な詩人の作であるというだけではなく、すでに述べたように、この書がある種、時代を超えたものになっているからではないだろうか。

この旅行記がタゴールの私的関心を映し出したものであることはすでに述べたが、同じ人物がときを同じくして書いたものとして、当然ながらその関心や発見においてスピーチ原稿（のちに *Nationalism in Japan* としてまとめられたもの）と重なる部分もある。その最たるものがタゴールの文明論、文明観であろうが、これこそが当時の日本の知識人との間で齟齬をきたした最大のテーマであると言ってもよい。

例えば海老名弾正は、その評論においてタゴールのスピーチを例外的に高く評価したひとりだが、その海老名もタゴールの

西洋対東洋という文明論には異議を唱え、日本は中国やインドの兄弟というよりはイギリスやフランスの兄弟であると述べているし⁴¹、例外的にタゴールに好意的だった秋田雨雀も、東大と慶應の二度の講演に足を運び、個人的にもタゴールを訪問しながらその東洋と西洋に分けて考える文明観には共感できなかつたと述べている⁴²。

もう少し広く当時の日本を眺めると、同時期に日本からヨーロッパへ渡った文学者として島崎藤村がいる。藤村は大正二年（一九一三年）に日本を発つてフランスに向かい、ちょうどタゴールが日本にいた一九一六年七月に帰国している。藤村は『海へ』と題してその船旅を描いており、これはある意味、——タゴールのような哲学的展開はないにせよ——『日本旅行者』の船上での記述と重なり合うものとなっている。興味深いことに、藤村はタゴールと逆のルートで港を辿りながらアジアの盟主は日本ではなく、イギリスであるとの思いを強くしている。また『海へ』と対になっている『エトランゼ』では、離れたところから日本を眺める視点も垣間見られるのだが、しかしそれは主にヨーロッパと日本を対置したもので、タゴールの文明論のようなグローバルな展開はない。さらに藤村は、日本を発つた理由として「私は、世界に於ける一等国の国民というようなことを無闇と振り回して欧羅巴人の仲間入りをさも誇りとしたり無智な支那人を擲ることを得意としたりするような左様いう同胞の全くないところへ行きたかった⁴³」と述べているが、ここに当時の風潮を読み取ることができる。

同じ頃ヨーロッパに渡った河上肇は、藤村より強く「文明」を意識している。その際の体験をもとに書かれた河上の『祖国

を顧みて』は主に文明論となっており、西洋と日本を対置させてその文明の異なる点を分析しているのが興味深い。河上はフランスで藤村と会っており、その際、議論となつて河上が「現代の日本が結局欧羅巴の文明に達しようとするだけでは私共は満足しません。それでは到底欧羅巴人には叶わないと思いません。日本には日本固有のですね、全く欧羅巴と異なつた、優秀な文明があると考えなければ、私共の立場はなくなります」と語つたと藤村が述べている。⁴⁴

こうした二人がタゴールのスピーチを聞いていたらどのような感想を持つたのだろうか。残念ながら二人ともそのような叙述は残していない。ただ、兩人ともに、「世界」や「文明」を考へるときに、日本とヨーロッパ以外の文明への視点が欠落していることは否めない。この時代の日本の知識人がインドを語るとき、植民地になつてしまつた当時の現状以外の事柄に言及することはまれである。その意味で、岡倉の著書は中国およびインドの文明を視野におさめており、世界を眺めるとき、単なる二点比較ではないスケール感がある。おそらくこのあたりがタゴールの持つスケール感と合致したのではないだろうか。

中国やインドも含めた東洋を西洋と対置して語ることのできるスケール感を持つた知識人と言へば、鈴木大拙も思い浮かべられる。鈴木が一九一六年のタゴールのスピーチを聴きに行つたかどうかは定かではないが、一九二四年にタゴールが再来日した際には通訳を務め、そのときの印象を鈴木はこのように語っている。

東洋人の哲学は「人間」を離れたものではなく、いつもそれか

ら出て居る。それを離れていない。これがその特性である。芸術でも人間性と分離して居ない。音楽も、詩歌も、画も、皆その「人」の修養と密接な関係を持つて居る。タ氏（タゴール）などは、その典型的なものと信ずる。⁴⁵

鈴木はこの解説はごく簡単なものだが、タゴールの「人間中心」の「語っている内容でなく、語っている自分が中心にある」ありようを想起させるものとなつて居る。

最後に、より若い世代として川端康成の場合を見てみよう。川端は一九一六年のタゴール来日時十七歳になつたばかりで、旧制中学の学生だつた。そのときのことを川端は以下のように回想する。

わたしはその年、まだ旧い学校制度の中学生でしたが、この詩人のふさふさと長い髪、長い口ひげ、長いあごひげ、そしてインド服をゆつたりまとつて丈高く、目のかがやきの強く深い、賢者のような風貌の写真が、大きく新聞に出たのを見て、今もおぼえています。白い髪は額の横にやわらかくひろがつて流れ、もみあげの毛はあごひげのように長くのびて、それが頬にもつらなり生えて、あごひげに続いて、東洋古代の仙哲のような顔が、少年のわたくしに印象を残したのでした。そしてタゴールの詩文には、中学生にも読めるほどにやさしい英語のもありましたので、わたくしは少し読んだものでした。⁴⁶

一九一六年に最も熱狂的にタゴールを迎えたのは女性を含む若い世代であつたと伝えられる。川端は、実際にタゴールを

訪ねたり講演を聞きに行ったりした若者たちよりもほんの少し年が下だったが、タゴール批判が主流だった当時の「名のある」大人たちとは対照的に、いまだ無名であった若い世代では、このようなタゴールに対する得も言われぬ好感や憧れが共有されていたのかもしれない。その川端は、先の引用に先立つ部分で以下のように語っている。

インドの詩聖といわれる、ラビインドラナアト・タゴールは、日本を訪れた時の講演のなかで、「すべての民族は、その民族自身を世界にあらわす義務を持っています。…(中略)…これはまたその民族の富である高潔な魂が、目の前の部分的な必要を越えて、他の世界へ、自国の文化の精神への招待を、送る責任を、自ら認める豊かさなのであります。」と言っています。「日本は一つの完全な形式を持った文化を生んできたのであり、その美の中に真理を、真理のなかに美を見抜く視覚を發展させてきた。」とも言っています。遠いむかしの「源氏物語」は今なおタゴールがここにいう「民族の義務」をわたくしたちよりもみごとに果たしていて、将来もはたしつづけるだろうと思えます。すことは、よろこぶべきことであるとともに、かなしむべきことでありましょうか。⁴⁷

これに続けて川端はさらにタゴールのことを引用する。いわく「日本がその美の中に真理を、真理の中に美を見抜く資格を發展させてきたことを(日本に)再び思い起こさせることは、私のような外来者の責任であると思います。日本は正しく明確で、完全な何物かを樹立してきたのであります。それが何であ

るかは、あなたがたご自身よりも外国人にとって、もっと容易に知ることが出来るのであります⁴⁸」とタゴールは述べたとされる。

実はこの文章は、川端がノーベル賞受賞後にハワイ大学で行った連続講演「美の存在と発見」をもとにしたものである。そして川端がここで引用しているタゴールのいうところの日本、「美の中に真理を、真理のなかに美を見抜く視覚を發展させてきた」そのありようは、『日本旅行者』のなかで語られているのと同じ日本であると言つてよい。

川端はこの連続講演で、源氏物語の「ものあはれ」などを中心に日本人の美意識について語っているのだが、その最後の部分で、ドナルド・キーンに「源氏物語のおもしろさは外国人の方がよりよく知っている」と言われてびっくりしたと語っている。そしてまた川端は、このキーンの言葉は先のタゴールの「あなたがたご自身よりも外国人にとって、もっと容易に知ることができる」という言葉と呼応していると考え、「わたくしは美の存在と発見のしあわせを思うのであります⁴⁹」と締めくくられている。

つまりここで川端が語り、また発見した日本は、タゴールが百年前に見出し、『日本旅行者』であらわした日本にも重なり、そしてそれはしばしば日本人にとっては見出し難く、外から発見されるものとしても語られるのだが、その意味で『日本旅行者』は今日新たな日本再発見の書としても読むことができるのではないだろうか。

1 タゴールは一九〇三年に「もしあなたがインドへ帰る途中に日本に寄ることができそうなら、わたしも同じ頃に日本に行つてそこで会えるようにしましょう。ニヴェディタのおかげで、わたしは一人の日本人と知り合いました。」と友人に書き送っている。[Thakur 1957: 82]この日本人とは岡倉天心のことで、タゴールはニヴェディタを介して岡倉と知り合った。ニヴェディタは宗教家ヴィヴェーカーナンダと親しかったアイルランド人女性で、岡倉はそもそもヴィヴェーカーナンダに会うために一九〇一年に渡印したのであった。なお、本文、注を問わず訳文は特に断りのない限り筆者によるものである。

2 タゴールは息子であるロティンドロナトに「太平洋回りで行かなければならない。そうすれば日本への旅は安くなるし、行きやすい。だからすぐに日本船を予約してくれ。」と書き送っている。[Thakur 1942a: 55]

3 ロティンドロナトへの手紙。[Thakur 1942a: 60]

4 六月四日付の大阪朝日新聞による。以後、和文を引用する際には、旧仮名遣いをあらためてある。

5 一九一五年に出たこうしたタゴール(ブーム)批判の主なものとしては、加藤朝鳥の「タアゴル流行に対する不満」[加藤 一九一五]や田中王堂の「タアゴル流行に就ての一考察」[田中 一九一五]などがある。

6 これに対して東大講演と慶大講演をもとにまとめられた“Nationalism in Japan” (のち“Nationalism in the West”および“Nationalism in India”)とあわせて *Nationalism* として出版された)は、この日本訪問の「公的」な部分を反映していると考えてよい。もちろん *Nationalism* および『日本旅行者』は同一の人物がほぼ同時期に書いたものとして多くの点で密接に関係している。しかしまた、かたや英語で書かれ、かたやベンガル語で書かれている

ということにも注意を払うべきであろう。すなわちこの両者には、「だれに向けて」書かれたかという点で決定的な違いがあるのである。

7 渋沢栄一は、実業家としてではなく、当時さまざまな宗教関係者を集めて組織されていた婦一協会の世話人としてタゴールと接触したようである。渋沢はのちのタゴールの日本訪問の際にも会食などを催している。日本女子大設立者の成瀬仁蔵も婦一協会のメンバーで、渋沢とともにタゴールを訪ねている。

8 タゴールはこれに先立ち、七月二日の慶應大学講演ののち、日本女子大学を訪れ、詩篇の朗読などを行っている。そののち軽井沢の三泉寮に招かれ、八月十六日から二十一日まで滞在し(宿泊したのは三井三郎助氏の別荘。三井別邸とも)、ほぼ連日講義を行った。

9 Prarnath Chaudhuri (1868-1946)。もともと英国に留学し、弁護士資格を取得したエリートだったがのちに文学に転じ、Biharの筆名で多くの作品を残した。

10 例えば [Maitra 1961]などは、こうした書簡集を文学的著作として扱うことを示唆している。

11 [Thakur 1881] (ページ記載なし)

12 タゴールからプロモト・チョウドリへの手紙。[Thakur 1945: 213-4]

13 [Thakur 1919: 145]『日本紀行者』には森本達雄氏による日本語訳があるが、ここでは解説の都合上から、以下すべて筆者があらためて訳したものととなっている。

14 *ibid.*, p. 90.

15 タゴール以外に旅行記のタイトルに「旅行者 (Yatri)」を用いた例がないではないが、一般的には「旅行」もしくは「紀行」を意味する *yatra* もしくは *bhraman* が用いられる。

16 [Thakur 1919: 48]

- 17 *ibid.*, p.13.
- 18 この部分はベンガルで長らく伝えられてきたラーダーとクリシュナの逸話を想起させる。ラーダーは牧女でヴィシュヌ神の化身であるクリシュナと恋に落ちる。クリシュナの笛の音を聞くと、ラーダーはいてもたってもいらなくなり、外へと彷徨い出るのである。
- 19 [Thakur 1919: 42-3]
- 20 *ibid.*, p.43.
- 21 *ibid.*, p.28.
- 22 *ibid.*, p.62.
- 23 *ibid.*, p.78.
- 24 *ibid.*, pp.78-9.
- 25 *ibid.*, p.80.
- 26 例えばタゴールは道で車や自転車がぶつかっても騒ぎにならないと言っている。また日本の子供は泣かないとも言っているが、これらの記述は今日でもよく知られていて、筆者も一度ならず日本の子供は本当に泣かないのかと訊かれたことがある。これらの文言は多少大げさではあるものの、インドと比較して日本が非常に静かで落ち着いて感じられたであろうことは理解できる。
- 27 タゴールが『茶の本』を読んでいたことは、『日本旅行者』のなかに記述があることから明らかである。岡倉の著作『*The Ideal of the East* (東洋の理想 1903)』、『*The Awakening of Japan* (日本の目覚め 1904)』、『*The Book of Tea* (茶の本 1906)』は、その一部がインドで書かれ、また岡倉がタゴール家と親交があったこともあって、当時ベンガルの知識人の間でよく読まれていた。翻ってこの著作の日本語訳はずっとのちになってから現れ(例えば『茶の本』の日本語訳が出版されたのは一九二九年である)、

- 日本の読書人にはあまり親しまれていなかったと考えられる。
- 28 日露戦争時にタゴールは日本の詩型を用いて三篇の短詩を発表している。[Thakur 1905]
- 29 同時期に日本を訪れたベンガル人の紀行文にも混浴の習慣についての記述があるが、そこではそれは非難されるべき前近代的な風習であるとされている。[Ghosh 1910]
- 30 タゴールは原邸で、当時原氏の手元にあった大観の「五柳先生」および「湘庭秋月」、観山の「弱法師」および「魔障図」を鑑賞、それらについて詳細に語っている。このうち「弱法師」はとりわけタゴールの気に入りに、のちに荒井寛方に模写を依頼、寛方はそれを携えてインドに渡った。この模写による「弱法師」は現在もピッツョ・パロティ大学(タゴールの設立した大学。現在は国立大学)に保存されている。
- 31 [Thakur 1919: 93]
- 32 *ibid.*, p.97.
- 33 *ibid.*, pp.99-100.
- 34 *ibid.*, pp.100-101.
- 35 *ibid.*, pp.105-6.
- 36 *ibid.*, p.106.
- 37 *ibid.*, p.111.
- 38 *ibid.*, p.113.
- 39 タゴールはその私信において「わたしはこの国の人々が岡倉の価値を理解していないことに驚いた。この事実は彼らの偏狭さを示している。ここへ来てからわたしは多くの重要な人物に会ったが、岡倉のような天才を持つ者はひとりとしていなかった」と述べている。[Thakur 1916: 321]ちなみに、タゴールと親交があったとされる野口米次郎に関しても、手紙類を

含めてタゴールの文章には全くと言ってよいほど出てこない。

40 タゴール来日時(一九一六年)の『新潮』七月号には文壇十八人による「如何にタゴールを見る乎」が掲載されたが、夏目漱石をはじめとする当時の文学者の反応はおおむね冷やかであった。

41 「海老名 一九一六・二〇一」

42 「秋田 一九五三」

43 「島崎 一九六七・十五―一六」『海へ』は始め一九一七年、中央公論に発表されている。もちろん藤村の渡欧の理由には、ここには書かれていない個人的なものが多分にあった。

44 *ibid.*, p.278.

45 「鈴木 一九六一・五」鈴木は一九一六年まで東大でも講師を務めていたので、東大講演を聞いた可能性はあるが、それについては特に触れられていない。

46 「川端 一九八二・三九七」ハワイ大学での一九六九年五月十六日の講演。

47 *ibid.*, p.396. この部分の川端の講演は五月一日に行なわれている。なお、ここにある最初の引用部分は一九二九年来日時のタゴールの講演「東洋文化と日本の使命」から取られたもの。このスピーチでタゴールは岡倉天心の果たした役割について力説している。「日本は」以下の引用部分は一九一六年の慶応大学での講演“The Spirit of Japan”より。

48 *ibid.*, p.387. タゴールの文章の引用は同じく“The Spirit of Japan”より。

49 *ibid.*, p.413. 同じく引用を“The Spirit of Japan”から取られている。

参考文献

- 秋田雨雀 一九一六 「山上のタゴール」『早稲田文学』一二九、七七〜八五頁
秋田雨雀 一九五三 『雨雀自伝』東京、新評論社
秋田雨雀 一九六五 『秋田雨雀日記』東京、未来社
岩野泡鳴 一九一六 「タゴール氏に直言す」『読売新聞』六月十六日および十七日
海老名弾正 一九一六 「詩人タゴールの文明批評を読む」『新人』七月号、二〇〜二五頁
加藤朝鳥 一九二五 「タアゴル流行に対する不満」『読売新聞』五月十五日
河上肇 二〇〇二 『祖国を顧みて』岩波文庫
川端康成 一九八二 『川端康成全集第三十八巻』東京、新潮社
島崎藤村 一九六七 『藤村全集第八巻』東京、筑摩書房
鈴木大拙ほか 一九六一 『タゴール、生誕百年祭記念論文集』東京、タゴール記念会
タゴール記念会編訳 一九六一 『タゴールと日本』東京、タゴール記念会
『タゴール著作集第八巻』一九八一、東京、第三文明社
田中王堂ほか 一九一五 『名士のタゴール観』東京、城南社
夏目漱石ほか 一九一六 「如何にタゴールを見る乎」『新潮』七月号
森本達雄訳 一九八七 『日本紀行』『タゴール著作集第十巻』東京、第三文明社
明社
森本達雄訳 二〇一五 『原典で読むタゴール』東京、岩波書店
Dasgupta, Sanjukta ed., 2014, *Towards Tagore*, Kolkata Visvabharati.
Ghose, Mannothanath, 1910, *Japan Prabas*, Kolkata, Empire Library.
Maitra, Somnath, 1961, *The Letters of Rabindranath Tagore, A Centenary Volume of Rabindranath 1861-1961*, New Delhi, Sahitya Academy.
Mandel, Sondatta, ed., 2014, *Travels of the Tagore Family*, Kolkata, Visva-bharati.

- Mukhopadhyay, Prabhakumar, 1936, *Rabindrajibani 2*, Kolkata, Visva-bharati.
- Pal, Prashantakumar, 1997, *Rabijibani 7*, Kolkata, Ananda Publishers.
- Tagore, Rabindranath, 1905, "Japaner prati" in *Bhandar*, Ashar, p.12.
- _____, 1881, *Europe-prabasi Patra*, Kolkata, Srisaradaprasad Gangapadhyay.
- _____, 1912, *Chinnapatra*, Kolkata, Visvabharati.
- _____, 1916, Letter from Rabindranth to Surendranath Tagore (2, September, 1916), *Visvabharati Patrika*, 18, no.2, p.321.
- _____, 1917, *Nationalism*, London, Macmillan and Co..
- _____, 1919, *Japan Yatri*, Kolkata, Visvabharati.
- _____, 1930, *Bhannushimher Patrabali*, Kolkata, Visvabharati.
- _____, 1942a, *Cithi Patra 2*, Kolkata, Visvabharati.
- _____, 1942b, *Cithi Patra 3*, Kolkata, Visvabharati.
- _____, 1945, *Cithi Patra 5*, Kolkata, Visvabharati.
- _____, 1957, *Cithi Patra 6*, Kolkata, Visvabharati.

追記)ここで扱った『日本旅行者』は、今年度本学で開催された国際ベンガル学会の発表論題でもあり、事実関係等において内容的に重なっている部分が少なくないことを申し添えておく。ただし、一方はベンガル人を中心とした学会参加者に向けて書かれたもの(英文)、一方は日本人に向けて書かれたもの(和文)としてその主旨と論の方向性は異なっている。なお、筆者は来日百周年記念として、この『日本旅行者』の新訳を来年出版する予定である。